

【研究論文】

保護者による幼児期の文字に関する指導 その実態と意識、保育者との連携

三田村 雅人

【要約】本研究の目的は、質問紙調査によって、保護者は家庭で幼児に平仮名に関する指導をどのように行っているのかという実態、園での平仮名に関する指導に関して、どのようなことを大事だと感じているのかという意識などを調査するとともに、園や小学校で行われている平仮名に関する遊びや指導を理解しているのかなどの実態を明らかにし、平仮名に関する指導への保護者の関わり方、保護者と保育者の連携の在り方を検討することにある。質問紙調査の結果、保護者は家庭で幼児に平仮名の読み書きを指導することを大事だと考え、実際に指導している保護者が多いこと、園での平仮名に関する指導に関しては、平仮名への関心を高めること、鉛筆の持ち方の指導、自分の名前の読み書き、平仮名を読むことを大事だと考えている割合が高いこと、園や小学校での平仮名に関する指導について知らない保護者の割合が高いことなどが明らかになった。このことをふまえ、平仮名に関する指導への保護者の関わり方、保護者と保育者の連携の在り方について考察した。

キーワード： 幼児教育、文字に関する指導、保護者、保育者、連携

1 本研究の目的

幼児の平仮名の読み書きに関して、国立国語研究所の1953年、1967年の調査結果⁽¹⁾において平仮名習得の早期化が報告されており、その国立国語研究所の1967年の調査と比較するために1988年に行った島村・三神（1994）の調査結果⁽²⁾において、読み書きできる平仮名がさらに増えていることが報告されている。最近の調査では、学研総合研究所の幼児白書 Web 版（2017, 2019）で、幼児が学習面ですでに身につけていることを保護者に調査した結果が報告されている⁽³⁾⁽⁴⁾が、5歳児の保護者の調査において「ひらがなが読める」と回答した割合が2017年の68.8%から2019年では75.3%、「ひらがなを書ける」と回答した割合が2017年の40.5%から2019年では47.3%となっており、平仮名の読み書き習得の早期化がさらに進んでいることは明らかである。

平仮名の読み書き習得の早期化を進めている要因としては、幼稚園や保育所、こども園での文字環境整備に加えて、文字に関する指導が大事であるという保護者の意識の高まり、（塾や通信教育などを含めた）家庭での文字に関する指導の広がりという要因が大きいと考えられる。学研総合研究所の幼児白書 Web 版（2019）「入学前に身につけさせておきたいこと（学習面）」の保護者調査では、1位が「ひらがなが読める」（70.8%）、2位が「ひらがなを書ける」（66.9%）、3位が「鉛筆を正しく持てる」（60.3%）となっており、「授業中の落ち着き」などの学習態度や「時

間がわかる」「簡単なたし算ひき算ができる」などよりも平仮名の指導に関することが上位となっている。

三田村（2020）は、幼児期における文字に関する指導において何を大事だと考えているのかという意識調査を保育者、小学校教諭（1年生担任）の双方に行った⁽⁵⁾。保育者、小学校教諭の意識が共通していることは、平仮名への興味関心を高めること、名前の読み書き、平仮名を読むことが大事であると考えていることである。意識が異なっているのは、平仮名の筆順や形を指導すること、平仮名を書くことについてであり、小学校教諭はあまり大事でないと考えているのに対し、保育者はこれらの指導を大事であると考えている割合が高いことが明らかになった。この意識の差には、平仮名に関する指導への保護者の思いが影響を及ぼしている面があると考えられる。意識調査の中の保育者の「平仮名に関する指導における迷いや悩み、課題」において、「保護者の方が、自分の子どもが平仮名を書けないという悩みを相談してきて、どう対応したらよいか悩む」、「子どもの興味関心の度合いと保護者の自分の子どもに平仮名を覚えさせないとだめだという思いのずれが大きくなっている。勉強、課題として家で平仮名指導に取り組んでいる家庭が増えてきたように思う」など、平仮名に関する指導における保護者との連携での迷いや悩みが記述されている。また、「平仮名の読み書きができなくても大丈夫ですと小学校の先生からお聞きするが、実際小学校に入学すると、板書したことを連絡帳に書いたり、友達の名前を健康観察などで読んだりすると保護者から聞いたことがある。実際どの程度まで平仮名の理解ができているとよいのか尋ねられた」といった保育者の記述もあり、保護者が小学校に入学した後の平仮名に関する心配を園に寄せ、それが園における平仮名に関する指導に影響を及ぼしていることが考えられる。

しかし、家庭において保護者が平仮名に関するどのような指導を幼児に対して行い、保護者は園で平仮名に関するどのような指導を望んでいるのかといった保護者の視点から調査研究を行っているものはあまりない。

そこで、本研究では、保護者が家庭でどのように平仮名に関する指導に関わっているのかという実態、園での平仮名に関する指導に関して、どのようなことを大事だと感じているのかという意識、園や小学校で行われている平仮名に関する指導への理解などの調査を小学校入学を控えた5歳児の保護者に行い、保育者の平仮名に関する指導の意識と比較し、分析考察することを通して、平仮名に関する指導への保護者の関わり方、保護者と保育者の連携の在り方について考察することを目的とする。

2 質問紙調査の概要

質問紙調査の対象は、E市のJ幼稚園、A保育園、A認定こども園、a認定子ども園、W認定こども園の5園の5歳児の保護者142人であり、118人から回答があった（回収率83%）。実施時

期は W 認定こども園が2021年8月2日から8月6日, 残り4園が2022年1月19日から1月23日である。

調査内容は, 園における平仮名に関する指導において, 関心を持つこと, 鉛筆の持ち方や筆順, 形の指導, 読み書きなどのうち, 何が大事かを保護者が選択肢で回答するもの, 家庭における平仮名に関する指導の意識と実態, 園や小学校で行われている平仮名に関する指導への理解を選択肢で回答するものが主な内容である。2020年に三田村が行った, 幼児期における文字に関する指導において何を大事だと考えているのかという保育者に対する意識調査の結果と今回の保護者の意識調査の結果を比較して考察するため, 共通する設問を設けた。調査に当たっては, 5園の園長に任意での調査協力を依頼し, 調査の趣旨, 調査内容, 調査方法を説明して同意を得た。5歳児の保護者に対しては, 調査の趣旨, 内容, 方法を記載した文書を質問紙調査とともに配布し, 5歳児クラスの担当者から保護者に説明してもらうことで同意を得た。

3 質問紙調査の結果

(1) 家庭での文字に関する指導

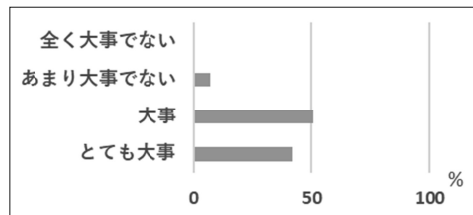


図1 家庭で平仮名の読みを練習すること

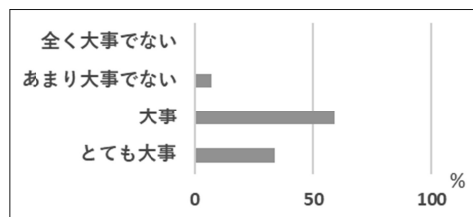


図2 家庭で平仮名の書きを練習すること

表1 家庭における平仮名指導の実態

回 答	人
子どもが興味を持った時に教えている	88
市販の平仮名ドリルを使用している	45
文字に多く触れる機会を作っている	18
幼児教室に通わせている	1
何もしていない	7
その他	12

図1は, 家庭で平仮名を読む練習（遊びも含む）をすることをどう思うかという質問に対する保護者の回答の集計結果である。図1において, 家庭で平仮名を読む練習をすることは「とても大事」「大事」と回答している保護者は110人（93%）となっており, 保護者は平仮名を読むことの家庭での指導の必要性を強く感じていることが明らかになった。

図2は, 家庭で平仮名を書く練習（遊びも含む）をすることをどう思うかという質問に対する保護者の回答の集計結果である。図2において, 103人（87%）の保護者が家庭で平仮名を書く練習をすることは「とても大事」「大事」と回答しており, 平仮名を読むことに加えて書くことの家庭での指導の必要性も保護者は強く感じていることが明らかになった。

表1は, 家庭で平仮名を読んだり書いたりする指導をどのようにしているかという質問に対する保護者の回答の集計結果である（複数回答可）。表1において, 「何もしていない」と回答した保護者は7

名(6%)であり、111人(94%)の保護者は家庭で何らかの形で平仮名に関する指導を行っている。一番多い保護者の平仮名指導の形は「子どもが興味を持った時に教える」となっており、幼児の興味関心を大事にしていることがわかるが、「市販の平仮名ドリルを使用している」保護者も2番目に多くなっている。「その他」でも通信教育の教材を挙げている保護者が4人おり、約4割の家庭でドリル的な文字に関する指導が行われていることが明らかになった。

(2) 園での平仮名に関する指導に対する保護者、保育者の意識

園において平仮名への関心を高めることは大事かどうかという質問に対する保護者の回答の集計結果と三田村(2020)による保育者の意識調査のデータを比較すると、保育者は33人全員が平仮名への関心を高めることは「とても大事」「大事」と回答し、保護者は113人(96%)が「とても大事」「大事」と回答している。平仮名への関心を高めることは、保護者、保育者ともに高い割合で肯定的な意識を持っており、園において平仮名への関心を高めることは大事だという意識は共通していることが明らかになった。

園において鉛筆の持ち方を指導することは大事かどうかという質問に対する保護者の回答の集計結果と保育者の意識調査のデータを比較すると、「とても大事」「大事」と回答している保護者は102人(86%)、保育者は31人(94%)とともに高くなっており、園における鉛筆の持ち方の指導は大事だという意識は共通していることが明らかになった。

図3は、園において平仮名の筆順、字形を指導することは大事かどうかという質問に対する保護者の回答の集計結果と保育者との比較である。図3において、「とても大事」「大事」と回答している割合は、保護者67人(57%)、保育者22人(67%)であり、平仮名の筆順、字形の指導について保育者の方が肯定的な意識が高く、保護者の意識は肯定的な意見と否定的な意見に分かれ、肯定、否定の割合もあまり差がないことが明らかになった。



図3 園で筆順、字形を指導すること

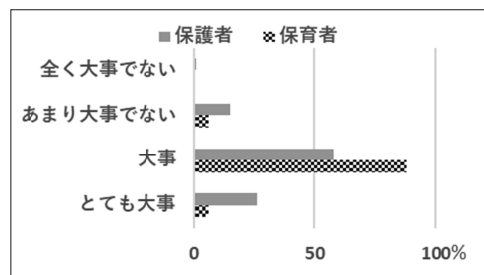


図4 園で平仮名の読みを指導すること

園において幼児の名前の平仮名の読み書きができるように指導することは大事かどうかという質問に対する保護者の回答の集計結果と保育者の意識調査のデータを比較すると、「とても大事」「大事」と回答している保護者は101人(86%)、保育者は32人(97%)とともに高く、名前の読み書きを指導することは大事だという意識は共通していることが明らかになった。

図4は、園において平仮名を読むことができるように指導することは大事かどうかという質問に

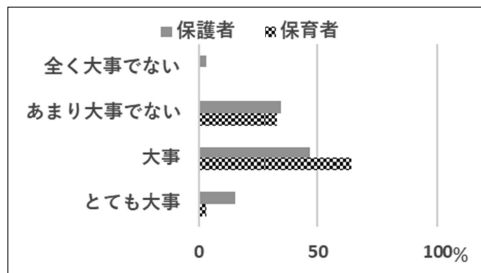


図5 園で平仮名の書きを指導すること

する保護者の回答の集計結果と保育者との比較である。図4において、「とても大事」「大事」と回答している保護者は99人(84%)、保育者は31人(94%)とともに高く、園において平仮名の読みの指導をすることは大事だという意識は共通していることが明らかになった。

図5は、園において平仮名を書くことができるように指導することは大事かどうかという質問に対する

保護者の回答の集計結果と保育者との比較である。図5において、「とても大事」「大事」の合計は、保護者73人(62%)、保育者22人(67%)となっており、園において平仮名を書くという指導をすることは大事であるという意識を持つ保護者、保育者が過半数を越えているということが明らかになった。また、平仮名の書きを指導することは「とても大事」という保護者の回答は、保育者より10%以上高くなっている。ただし、保護者、保育者ともに平仮名を読むことの指導ほど書くことの指導に対する肯定的な意見の割合は高くなく、園での平仮名を書く指導は「あまり大事でない」「全く大事でない」という意識持つ保護者、「あまり大事でない」という意識を持つ保育者が一定数存在している。

園において平仮名を読んだり書いたりすることができるようにするため、プリントなどでドリル的に練習することは大事かどうかという質問に対する保護者の回答の集計結果において、平仮名の練習をドリル的に行うことを「とても大事」「大事」と回答している保護者は69人(58%)、「あまり大事でない」「全く大事でない」と回答している保護者は49人(42%)であり、意識が分かれていることが明らかになった。

(3) 小学校につながる平仮名習得に関する保護者の不安

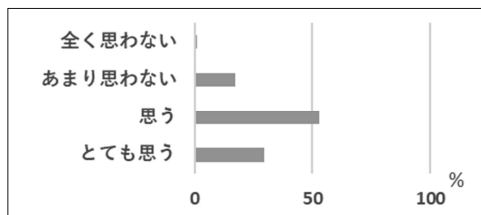


図6 平仮名の読み書きができないと困るか

図6は、ある程度平仮名を読めたり書けたりしないと、小学校入学後子どもたちは困ることがあると思うかという質問に対する保護者の回答の集計結果である。図6において、97人(82%)の保護者が「とても思う」「思う」と回答している。ある程度平仮名の読み書きができないと子どもが小学校に就学した

後困るのではないかと不安を多くの保護者が抱えていることが明らかになった。

(4) 園や小学校の平仮名に関する指導の理解

図7は、園において、郵便屋さんごっこ、お店屋さんごっこのメニューや看板づくり、ことば遊びや文字遊びなどを通して平仮名への関心を高めたり、平仮名の役割を実感させたりしている

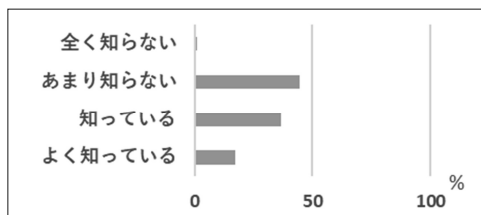


図7 園の文字に関する遊び指導の理解

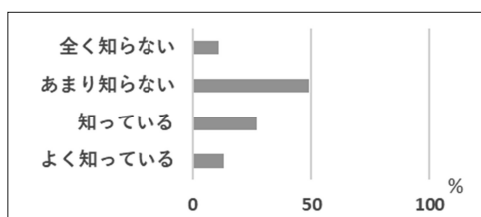


図8 小学校の平仮名学習の理解

ことを知っているかという質問に対する保護者の回答の集計結果である。図7において、64人（54%）の保護者が「よく知っている」「知っている」、54人（46%）の保護者が「あまり知らない」「全く知らない」と回答している。わずかながら「よく知っている」「知っている」保護者の割合が高くなってはいるものの、園における文字に関する遊びや指導などへの保護者の理解が十分でないことが明らかになった。

図8は、小学校1年生でいつ、どのように平仮名の学習をしているかを知っているかという質問に対する保護者の回答の集計結果である。図8において、47人（40%）の保護者が「よく知っている」「知っている」、71人（60%）の保護者が「あまり知らない」「全く知らない」と回答しており、園における文字に関する遊びや指導などへの理解以上に、小学校での文字学習への保護者の理解が十分でないことが明らかになった。

4 質問紙調査結果の考察

(1) 保護者による平仮名に関する指導の実態

保護者は、家庭において幼児が平仮名を読んだり書いたりする練習をすることを大事であると考えていることが明らかになった（図1、2）。平仮名の読み・書きを比較すると、平仮名を読むことの練習が大事だと考えている保護者は110人（93%）で、平仮名を書くことの練習が大事だと考えている保護者の割合103人（87%）より高くなっており、保護者は家庭において平仮名を読むことの練習をより重視していることがわかる。

実際に平仮名の読み書きの練習をしているかどうかについては、「何もしていない」と回答した保護者は7人で、118人中111人（94%）の保護者が何らかの形で幼児に対して平仮名の読み書き指導を行っていることがわかる（表1）。指導の方法としては、子どもの興味関心を大事にしながら指導をしている保護者が多く、「子どもが興味を持った時に教えている」（88人）、「文字に触れる機会を作っている」（18人）となっている。具体的には、絵本の読み聞かせをしたりいっしょに読んだりする、家族に手紙を書く、平仮名の表を貼る、タブレットを活用する、買い物に行くときいっしょに「お買い物リスト」を作るなど、楽しく文字に触れられるようにそれぞれの家庭で文字環境を工夫していることがわかる。

一方、「市販の平仮名ドリルを使用している」（45人）、「通信教育の教材を使用している」（4人）、「幼児教室に通わせている」（1人）という家庭での平仮名指導の状況もあり、ドリル的な平仮名

指導の教材を使用している保護者も多くいる（42％）ことが明らかになった。ドリル的な平仮名指導の教材をどのように使用しているかは明らかになっていないが、強制的な平仮名指導は避けるべきである。内田（2017）は、親のしつけスタイルと子どもの語彙力の関連を調べるための調査を行っている⁽⁶⁾。その結果、「共有型」（子どもとのふれあいを大切に、楽しい体験を親子で共有する）しつけを受けている子どものリテラシー得点や語彙得点は高く、「強制型」（禁止や命令、力のしつけを多用し、子どもを親に従わせようとする）しつけを受けている子どものリテラシー得点や語彙得点は低くなることを明らかにし、「子どもの主体性を大事にした（大人の）関わり方」が重要であるとしている。幼児に対する強制的な教え込む平仮名指導は効果的ではないことが明らかになっている。そのことをふまえ、少なくとも幼児が平仮名に興味関心を示した時にタイムリーに遊びとしてドリル的な平仮名指導の教材を使用する、ドリル教材に終始するのではなく、ドリル教材を使用する前後に、平仮名を活用する必然性のある場面を設け、平仮名は便利だ、大事だと実感させることなどの使い方が大事になる。

（2）平仮名に関する指導についての保護者、保育者の共通する意識

園における平仮名に関する指導に対する保護者、保育者の意識は、共通するものが多い。園において、平仮名への関心を高めることに対する「とても大事」「大事」という肯定的な意識は、保護者113人（96％）、保育者33人（100％）、鉛筆の持ち方を指導することに対する肯定的な意識は、保護者102人（86％）、保育者31人（94％）、名前の読み書きを指導することに対する肯定的な意識は、保護者101人（86％）、保育者32人（97％）、平仮名の読みを指導することに対する肯定的な意識は、保護者99人（84％）、保育者31人（94％）（図4）となっており、この4項目においては、保護者、保育者ともに高い割合で「とても大事」「大事」という肯定的な意識を持っていることが明らかになった。三田村（2020）の調査では、幼児期に平仮名への関心を高めること、名前の読み書きを指導すること、平仮名の読みを指導することの3項目については小学校担任も肯定的な意識を持っていることが明らかになっている。

三田村（2020）の調査では、保育者が小学校1年担任に聞きたいことの1位が小学校就学までに平仮名の読み書きはどの程度までできるといいかであるが、保護者も、幼児の就学後の平仮名に関して不安を抱えていることが明らかになっている（図6）。ある程度平仮名の読み書きができないと就学後困るかという質問項目に対して、97人（82％）の保護者が「とても思う」「思う」と回答しており、このことにより保護者は家庭で幼児に平仮名に関する指導を行い、園においても平仮名に関する指導を望んでいると考えられる。

ただ、平仮名への関心を高めること、鉛筆の持ち方を指導すること、名前の読み書きを指導すること、平仮名の読みを指導することの4項目すべてで、「とても思う」「思う」という保護者の肯定的意識は保育者より10％程度低くなっている。これは後述する保護者の自由記述から窺えることであるが、園では幼児は平仮名への興味関心を大事にして楽しく平仮名に接してほしいと

考える保護者や平仮名の読み書きは家庭で行うものという意識を持つ保護者が一定数いることによると考えられる。

(3) 平仮名に関する指導についての保護者の中での意識のずれ

園における平仮名に関する指導に対する保護者の中での意識には、平仮名の筆順、字形を指導すること、平仮名を書くことの2項目でずれが生じている。園において、平仮名の筆順、字形を指導することに対しては、保護者の「とても大事」「大事」という肯定的な意識は67人(57%)、「あまり大事でない」「全く大事でない」という否定的な意識は51人(43%)とずれが生じている(図3)。平仮名を書くことに対しては、保護者の肯定的な意識は73人(62%)、否定的な意識は45人(38%)とここでもずれが生じている(図5)。この2項目は、保育者の中で意識と実際の指導にずれが生じている項目でもある。三田村(2020)は、平仮名の筆順や形を指導することは大事であると考えている保育者が22人(67%)であるのに対し、実際指導している保育者は19人(58%)にとどまっていること、遊びも含めて平仮名を書くことの指導は大事でないとしている保育者が11人(33%)いるのにもかかわらず、実際は全員の保育者が遊びも含めて書くことの指導に関わっていることという保育者の中での2つの意識と実態のずれに着目した。平仮名の筆順や形の指導は大事であるが、指導をすることで幼児は平仮名への興味関心をなくすのではないかという心配もあるという揺れ、平仮名を書くことまでは園で指導しなくてもよいのではないかと思うが、書けないと小学校で困るということも聞いており、幼児が小学校就学後困らないように平仮名の書きも指導したいという保育者の揺れが、保育者の意識と実態のずれを生みだしているのではないかと考えた。こうした揺れが保護者にもあると考えられる。平仮名の筆順や形の指導、平仮名を書く指導は大事であり、指導はしてほしいが、指導をすることで平仮名を読んだり書いたりすることを嫌いになるのも困るという保護者の揺れが、意識のずれにつながっていると考えられる。

(4) 園や小学校における平仮名に関する指導についての保護者の理解

園が行っている平仮名に関する遊びや指導、小学校1年生で行われている平仮名学習について保護者の理解が十分でないことが明らかになった(図7, 8)。園の平仮名に関する遊びや指導については、54人(46%)の保護者が「あまり知らない」「全く知らない」と回答している。小学校の平仮名学習についての保護者の理解はさらに十分でなく、71人(60%)の保護者が小学校1年生の平仮名学習について「あまり知らない」「全く知らない」と回答している。こうした園や小学校の平仮名に関する遊び、指導についての保護者の理解の不十分さは、平仮名の習得について保護者の根拠のない不安やあせりを生み、家庭でのドリル的な平仮名指導の推進につながることで危惧されるため、園での平仮名に関する遊びや活動の様子を知ってもらう機会や場面を設定するなど、保育者と保護者の連携が必要である。

(5) 平仮名習得に関する保護者の自由記述

表2 平仮名の習得に関する自由記述

平仮名への興味関心, 楽しさを大事にした指導についての記述 (15名)
・小学校入学前は無理に(強制的に)平仮名を教える必要はないと考えていますが, 遊びを通して平仮名に関心を持たせることはいいと思います。
・平仮名の読み書きに関しては, 家庭でやるべきだと思っています。園では平仮名に興味を持つようにして下さるだけで十分だと考えています。
平仮名の習得に関して困っていること, 心配なことについての記述 (8名)
・平仮名の読み書きは自然とできるようになるかなと思い, 熱心に教えたりはできておらず, 周りの子が上手に平仮名を書けていたりすると, ちょっと焦ってしまいます。
・筆順の教え方はとても大変です。どう子どもに伝えたらいいかわからない。
小学校就学をふまえた平仮名の指導についての記述 (6名)
・小学校で丁寧に平仮名の書き方の指導があるので, 園ではそこまでしっかり指導しなくてもいいのではないかと思います。
・平仮名の読み書きの苦手さを早くつかみ, 小学校入学から適切に支援が受けられるようにすることも大切だなと感じています。
友達との関わりの中での平仮名習得についての記述 (3名)
・自宅よりも園での平仮名の読み書きの方が, 友達と楽しくできるため覚えが早くなると思うので, 園で取り入れてもらえるといいと思います。

質問紙には, 平仮名の読み書きの習得について自由記述をする欄を設けたが, 質問紙に回答のあった保護者118名のうち, 記述があったのは32名である。

表2は記述されたものを内容ごとに分類したものであるが, 自由記述の内容で一番多かったのは, 園での平仮名に関する指導における幼児の興味や楽しさについて記述したものであり, 幼児の平仮名への興味関心, 幼児の平仮名を楽しむ活動を保護者が大事だと考えていることが自由記述からもわかる。園では幼児の興味や楽しさを大事にしながら平仮名に関する指導をしてほしい, 実際そういう指導をしてもらっているのよという内容がほとんどである。理由としては幼児期には平仮名に興味を持つことが大切であることを多くの保護者が記述しているが, 表2のように「平仮名の読み書きは家庭でやるべき」という意見や幼児の成長や興味の個人差への対応を記述している保護者もいる。

二番目に多かったのは, 平仮名の読み書きの習得で困っていること, 心配に思っていることについて記述したものである。その中でも多いのが筆順に関することで, 「小さい時, 独学でオリジナルの筆順で覚えてしまうと, なかなか直せない」「家で教えるのと小学校で教える筆順が違っていると, 子どもが戸惑うので教えることは難しい」など5名の保護者の記述がある。筆順指導の難しさは, 保育者の悩み課題と共通しており, 三田村(2020)の調査では, 保育者の平仮名習得に関する悩み課題において筆順に関することが2番目に多くあげられている。また, 「小学校に就学する時に, どの程度平仮名の読み書きができれば心配いらないのか不安だ」や「園で平仮名に関する指導があると思っていたが, 小学校就学前になって平仮名を覚えていないことがわかり, あせって市販の平仮名ドリルを買って教えた」など, 園や小学校における平仮名に関する指導に

についての保護者の理解が十分でないことからの不安や悩みも記述されている。

三番目に多かったのは、小学校就学をふまえた平仮名の習得について記述したものである。「きちんとした平仮名に関する指導は小学校からでよいと思うが、早く平仮名を読んだり書いたりできることに越したことはない」という内容を3名の保護者が記述しているほか、「小学校までに平仮名の読み書きができる必要があるなら、園で統一して教えたほうがよいと思う。小学校で一から教えてもらえるなら、園で教える必要はないと思う」という記述があり、小学校における平仮名に関する指導についての保護者の理解が十分でないことから、小学校就学後に幼児が平仮名の読み書きで困らないか心配している保護者の姿がうかがえる。また、表2の平仮名の読み書きの苦手さをつかみ、小学校入学から適切に支援が受けられるようにすることの大切さを記述した保護者の意見は、平仮名に関する指導に保護者や園がどう関わっていくのかということを考える上での大事な視点になると考える。

四番目に多かったのは、平仮名の習得について、園での友達との関わりということから記述しているものであり、3名の保護者の記述があった。記述内容は3名ともに、「家庭では強制的な教え込みになってしまって、子どものやる気を無視しがちになってしまいが、園で友達といっしょにやると楽しく平仮名の読み書きの活動ができると思うので、園でそのような環境を取り入れてほしい」という内容となっている。ここでも、保護者は友達との平仮名の読み書きの活動における楽しさを大事に考えていることがわかる。

5 保護者は幼児の文字に関する指導にどう関わるべきか

(1) 須田清による母親への訴え

須田清(1967)は「かな文字の教え方」の中で、幼児のための文字指導法について記している⁽⁷⁾。須田による幼児のための文字指導法である、音節分解の指導から始める音声法についてここでは詳しく触れないが、須田の授業記録を見ると、音節を記号に置き換える「黒点法」や具体的に文字の形を視覚に表すための教具による指導、紙人形や物語を活用した平仮名指導は幼児の興味や楽しさを大事にしていることがわかる。

須田が家庭における文字指導をどのように考えているのかは次の記述からわかる。須田は「かな文字の教え方」の中で、母親に次のように呼びかけている。「おかあさんがた、(中略)正しい指導法を学習して、積極的に子どもに文字を教えましょう。幼児に対する文字指導は、(中略)ながい時間子どもをしぼりつけ、ガミガミ強制することでもありません。わずかな時間を利用して、『おもしろく組み立てられた文字遊戯』を子どもといっしょに遊ぶことで果たされます」。須田は、文字は家庭で教えるべきである、と主張しているわけではない。親子という関係は「知的な継続的・体系的な学習をするのには適切ではない」ので、「幼児にたいして本格的な文字教育をほどこす場所は、幼稚園や保育園であってほしい」と考えている。しかし、強制せず、正しい指導法

で楽しく行うならば、家庭で文字を教えることは躊躇しなくていいと記している。では、保護者が幼児の平仮名の習得に関わることは大切なのだろうか。また、どう関わるといいのだろうか。

(2) 家庭における幼児の文字に関する指導への保護者の関わりの大切さ

ベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に幼児の母親1,074名を対象に、「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査」を実施した⁽⁸⁾。その調査結果からの考察として、「親子で『知的なやりとり遊び』（ことば遊びや絵本読み聞かせ、知育玩具やブロック遊び、数を数えるなど）をよくする家庭のほうが、5歳児の『学びに向かう力』『文字・数・思考』の力が高い」としている。例えば、親子で知的なやりとり遊びを行う頻度の高い幼児は、頻度の低い幼児より、基礎的な読み書きである「自分の名前を読める」割合が、8%ほど高くなっている。また、ベネッセ教育総合研究所は翌2015年3月にも幼児の母親544名を対象に調査を行っている⁽⁹⁾が、その結果として、「年長児期に、親が子どものやりたい気持ちや考える行動を支えるほど、子どもの『がんばる力』や『言葉』の力は高まる」としている。こうしたベネッセ教育総合研究所の調査結果（2014, 2015）や前述した、子どもとのふれあいを大切に、楽しい体験を親子で共有する「共有型」しつけを受けている子どものリテラシー得点や語彙得点は「強制型」しつけをされた子どもより高く、「子どもの主体性を大事にした（大人の）関わり方」が重要であるという内田（2017）の調査結果からは、幼児の平仮名の習得において、文字に関する楽しい活動（遊び）を媒介として保護者が幼児に適切に関わることの大切さが浮かび上がってくる。

(3) 幼児の平仮名の習得に関わる早期支援への保護者の関わり

2012年の文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」によると、発達障害の可能性のある児童生徒の割合は6.5%となっている（平仮名習得に係る「読む」又は「書く」に著しい困難を示す児童生徒の割合は4%）⁽¹⁰⁾。こうした状況を受けて、文部科学省「特別支援教育の推進について（通知）」（2007）においては、「小学校及び特別支援学校において障害のある児童が入学する際には、早期に保護者と連携し、日常生活の状況や留意事項等を聴取し、当該児童の教育的ニーズの把握に努め、適切に対応すること」としている⁽¹¹⁾が、このことは当然、幼稚園や保育所等においても求められていることである。

平仮名の習得に関わると考えられる発達障害には、「学習障害」がある。文部科学省は学習障害を「全般的に知的発達に遅れはないが、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」といった学習に必要な基礎的な能力のうち、一つないし複数の特定の能力についてなかなか習得できなかったり、うまく発揮することができなかったりすることによって、学習上、様々な困難に直面している状態」と定義している⁽¹²⁾。「幼稚園教育要領」には、第1章第5において「特別な配慮を必要とする幼児への指導」について書かれている⁽¹³⁾が、園では「学習」は行われない

ので、ここでの「特別な配慮を必要とする幼児」には発達障害の中の学習障害は含まれていないと考えられる。しかし、園において遊びを通して幼児が平仮名を読んだり書いたりし、多くの家庭において幼児の平仮名の習得に保護者が関わっている状況においては、幼児期においてすでに平仮名の読み書きに幼児が困り感を抱えていたり、保護者が不安を抱えていたりすることが考えられ、平仮名の習得に関わる幼児期の早期支援が必要になっているのではないかと考えられる。

東保（2017）は、学習障害の早期発見、早期支援について「日本では、文字に関する教育は就学後に始まる。文字の獲得につまずきを生じた子どもに対して、つまづいた時に適切な支援を開始することは重要なことである。しかし、文字の獲得過程は就学前から始まっていることや先行研究から、後に読み書きに問題を生じる可能性のある予測因子が見つかっている。つまづいてからの支援ではなく、つまづく可能性のある子どもを早期に発見して、つまづく前に早期に支援を提供することが重要であり、子どもにとっても有効なことであると考ええる」⁽¹⁴⁾とし、幼児期においても文字の習得などにつまずきのある学習障害の早期発見、早期支援が重要であるとしている。

平仮名の読み書きが困難な幼児については、ディスレクシアの可能性がある。国立成育医療研究センターでは「ディスレクシアは、1896年に英国のMorgan先生が最初に報告した文字の読み書きに限定した困難さをもつ疾患です。知的能力の低さや勉強不足が原因ではなく、脳機能の発達に問題があるとされています。そのため発達障害の学習障害に位置づけられており、（中略）読字に困難があると当然ながら書字にも困難があります」としている⁽¹⁵⁾。石井（2004）は、読み書きが困難な子どもの中に多くディスレクシアが存在しているにもかかわらず、日本ではあまり知られていないため、見逃されたり、他の発達障害と混同されたりする危険性があるが、「早期に適切な支援を開始すれば、児童はADHDや自閉症に比べ比較的容易に通常授業に同調できる」として、早期発見、早期支援が重要性であるとしている⁽¹⁶⁾。また、「平仮名習得の早期化の理由が、強制的な教え込みか、文字環境の整備か意見が分かれている。幼児期に強制的な教え込みの影響が大きいとすると、ディスレクシアの子供は幼児期に既に、精神的苦痛を感じている事は想像に難くない。子供の心の問題に関して、小学校のみならず、家庭や幼稚園・保育園での文字・数字教育の実情と幼児の心の発達への影響を調査する必要がある」として、早期発見方法の確立が必要であるとしている。

以上のことをふまえると、保護者が幼児の文字習得に関わる上で大事なことが浮かび上がってくる。まず大事なことは、保護者は平仮名の読み書きに関して幼児に強制的な指導を行わないことである。質問紙調査結果から49人（42%）の保護者がドリル的な平仮名指導を行っていることが明らかになった（表1）が、強制的な平仮名指導においては幼児の平仮名への関心が低くなるだけでなく、効果的でない。このことは、前述した内田（2017）の調査結果から明らかである。強制的な文字指導を行わないことは、学習障害やディスレクシアの幼児の精神的苦痛を防ぐことにもつながる。平仮名への関心を大事にした遊びなどの親子の関わりが大事である。

二つ目に大事なことは、幼児の文字の習得に関する実態を保護者がありのままに受け止めることである。言葉の発達には個人差があり、平仮名の読み書き習得にも個人差がある。質問紙調査の保護者の自由記述に「周りの子が上手に平仮名を書けていたりすると、ちょっと焦ってしまいます」という記述があったが、他の幼児と比べない、あせらない、根拠のない情報に惑わされないことである。平仮名をよく読み間違ふ、鏡文字を書くなどの原因が学習障害、ディスレクシアである場合、強制しても直らないどころか、幼児に精神的苦痛を与えることになる。障害があるということになれば、それを受け入れがたいという保護者もいると考えられるが、実態を受け入れることで次に進むことができる。

三つ目に大事なことは、文字習得に関する気がかりなことを保護者が保育者や専門家に相談することである。質問紙調査の保護者の自由記述に「平仮名の読み書きの苦手さを早くつかみ、小学校入学から適切に支援が受けられるようにすることも大切だなと感じています」という記述があるが、文字習得の気がかりさを保護者が保育者や専門家に相談することで、幼児の実態に合った支援、家庭と園と連携した支援、さらには小学校就学後の支援につなげることができる。このことは幼児、保護者の精神面にもよい影響を及ぼすことが考えられる。保護者が幼児の平仮名習得に関わる目的は、幼児の平仮名の習得を早めることであろうが、保護者が幼児の平仮名習得の実態を適切に把握して園や専門家と共有することができれば、個人差に応じた支援や学習障害、ディスレクシアの早期発見早期対応へとつなげることもできる。

(4) 保護者と保育者との連携

家庭において保護者が幼児の文字習得に適切に関わるために、また、幼児の文字習得に関しての気がかりさを早期に発見し早期に支援するために、保護者と保育者の連携は大切であると考えられる。しかし、質問紙調査から、園における郵便屋さんごっこやお店屋さんごっこ、ことば遊びや文字遊びなどを通して平仮名への関心を高めたり、平仮名の役割を実感させたりしていることを知っているかという質問に対して、保護者の54人(46%)が「あまり知らない」「全く知らない」と回答しており(図7)、文字に関して連携がとれているとは言い難い状況である。質問紙調査を行ったのは5つの園の保護者に対してであるが、保護者が、園で行っている文字に関する活動(指導)を知っているかどうかの割合は、園によって差がある。知らないと回答した割合の最も高い園では、55%の保護者が園における文字に関する活動を「あまり知らない」「全く知らない」と回答しており、知らない保護者が半数を超えている。それに対して、保護者の69%が園における文字に関する活動(指導)を「よく知っている」「知っている」と回答している園もある。この園では保育ドキュメンテーションを取り入れている。保育ドキュメンテーションとは、イタリアのレッジョ・エミリア市から始まった、幼児の様子を写真や動画、文字など視覚的な形で記録するものであるが、そうした幼児の活動の記録を週3回程度、保護者と共有しているため、その園の文字に関する活動に対する保護者の理解が高いと考えられる。

園では、運動会や発表会などの様々な行事があり、保護者との懇談会を設定している園も多い。そうした機会に、郵便屋さんごっこにおけるお手紙やお店屋さんごっこの看板やメニュー、文字遊びなどの活動の記録が掲示してあったり、話題として取り上げられたりすれば、保護者は幼児が楽しく文字に接していることを知り、園での文字に関する活動について理解を深めることができる。また、文字習得の早期化が進み、多くの家庭で保護者が幼児の文字習得に関わっている現在、園としての文字に関する方針や家庭との連携の在り方を保護者に示すことも必要になってきているのではないかと考えられる。さらには、小学校1年生でいつ、どのように平仮名の学習をしているかを知っているかという質問に対して、71人（60%）の保護者が「あまり知らない」「全く知らない」と回答している（図8）ことをふまえ、保幼小連携を進め、保育者が小学校での文字学習の情報を園の保護者に提供できるようにしておくことも必要であると考えられる。そうすれば、保護者の幼児教育における文字に関する活動、小学校における文字に関する指導の在り方への理解が深まり、自由記述にあった、小学校で平仮名をしっかりと教えてくれるので、園では楽しく文字に接することをしてほしいというような意見が多くなると考える。

前述したベネッセ教育総合研究所は、調査結果（2015）から「年長児期に《生活習慣》や《学びに向かう力》の『がんばる力』、《文字・数・思考》の『言葉』が身につけている子どもほど、小1で「自ら進んで学ぶ」傾向にあることがわかりました。年長児期において、保護者が子どもの意欲や自分で考える行動を支えることが、子ども自身が育つ力を支えるのに重要であることもわかりました。さらに、4年間を通した縦断調査の結果、子どもの育ちには、《生活習慣》と《学びに向かう力》と《文字・数・思考》の育ちに順序があることが、今回の調査結果からみえてきました。（中略）早期から文字・数・思考の教育だけに力を入れるのではなく、子どもの育ちに沿いながら、幼児期の生活と遊びを通して、生活習慣と学びに向かう力を培うことの大切さを示すと思われます」としている。文字に関する指導における保護者と保育者の連携の在り方としては、園では楽しく、家庭ではドリルというような役割分担ではなく、ともに幼児の文字への関心を高めたり、文字習得への意欲を大事にしたりするという形であるべきである。保育者は、幼児が園で楽しく文字に関する活動をしており、文字への関心が高まっていることを保護者に知ってもらうこと、家庭でも園と同様に、強制やドリルではない形で、保護者が幼児の文字に関する遊びや文字習得に関わることで小学校につながることを保護者に理解してもらうこと、幼児の文字習得に関しての気がかりさを早期に発見し早期に支援できるように相談しやすい環境を作ることなどが、文字習得に関する保護者、保育者の連携のよりよい形であると考えられる。

謝 辞

質問紙調査にご協力いただいたE市内幼稚園、保育園、認定子ども園の先生方、保護者の方に心から感謝申し上げます。

引用文献, 参考文献

- (1) 国立国語研究所 (1972) 幼児の読み書き能力 東京書籍
- (2) 島村直己・三神廣子 (1994) 幼児のひらがなの習得—国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して—教育心理学研究第42巻 pp.72-76
- (3) 学研総合研究所 (2017) 幼児白書 Web 版 <https://www.gakken.co.jp/kyouikusuken/whitepaper/k201708/index.html> (2022年1月30日最終閲覧)
- (4) 学研総合研究所 (2019) 幼児白書 Web 版 <https://www.gakken.co.jp/kyouikusuken/whitepaper/k201908/index.html> (2022年1月30日最終閲覧)
- (5) 三田村雅人 (2020) 幼児期の文字に関する指導 小学校との連携をふまえて 仁愛大学研究紀要人間生活学部篇第12号 pp.43-54
- (6) 内田伸子 (2017) 学力格差は幼児期から始まるか? ～保育と子育ては子どもの貧困を超える鍵になる～ 江戸川大学こどもコミュニケーション研究紀要 Vol.1 pp.1-8
- (7) 須田清 (1967) かな文字の教え方 むぎ書房
- (8) ベネッセ教育総合研究所 (2015) 幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査 (4～5歳児) ～同一の子どもについて, 4年間にわたる変化をとらえる追跡調査結果・第2弾～ https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/20150304release.pdf (2022年1月30日最終閲覧)
- (9) ベネッセ教育総合研究所 (2016) 幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査～同一の子どもについて, 4年間 (3歳～小学1年生) の変化をとらえる追跡調査結果・第3弾～ https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/pressrelease_20160308.pdf (2022年1月30日最終閲覧)
- (10) 文部科学省 (2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について
- (11) 文部科学省 (2007) 特別支援教育の推進について (通知) 6. 保護者からの相談への対応や早期からの連携
- (12) 文部科学省「学習障害とは」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/mext_00808.html (2022年2月14日最終閲覧)
- (13) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- (14) 東俣淳子 (2017) 学習障害の早期発見・支援に関する研究 愛知県立大学教育福祉学部論集 第66号 pp.49-55
- (15) 国立成育医療研究センター「ディスレクシアとは」 <https://www.ncchd.go.jp/hospital/sickness/children/007.html> (2022年2月14日最終閲覧)
- (16) 石井加代子 (2004) 読み書きのみの学習困難 (ディスレクシア) への対応策 科学技術動向2004年12月号 pp.13-25